



Title	〈巻頭言〉 能登半島地震：協働的实践からアクション リサーチまで
Author(s)	渥美, 公秀
Citation	災害と共生. 2025, 8(1), p. 1
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/98897
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈巻頭言〉 能登半島地震 ―協働的实践からアクションリサーチまで―

The Noto Earthquake in 2024 —From Collaborative Practice to Action Research
— Preface —渥美公秀¹

Tomohide Atsumi

1. 巻頭言

2024年1月1日に発生した令和6年能登半島地震で被害に遭われた皆様に心よりお見舞い申し上げます。『災害と共生』第8巻1号では、能登半島地震に関する論考を集めた特集を組みました。

元日の夕方に発生した能登半島地震は、海岸の隆起や半島という地理的特性に加えて、まるで最近の災害による被害を集約したかのような複合的な様相を呈しました。ビルの倒壊や火災は1995年の阪神・淡路大震災を彷彿とさせます。津波による被害と原発立地は2011年の東日本大震災を想起させます。そして道路の寸断等による高齢過疎集落が孤立するという事態は2004年の新潟県中越地震の被災地と重なります。文字通り甚大な被害でしたが、能登半島は地域の人間関係が強く維持されていると言われ、祭に象徴されるようなコミュニティの力が被災地での共助を進めたり、避難所での対応に工夫が見られたりしたという面もありました。季節が移りゆく中でようやく住居の片付けが始まり、店舗の修繕や改築等を経てなんとか新たな生活を始めようとしていた矢先の9月21日、今度は豪雨災害で甚大な被害が発生しました。被災地では、「もう心が折れてしまう」という言葉を何度も耳にするような悲惨な状況が続いています。

実際に被災地を訪れてみますと、これまでの被災地と大いに異なる街の様子に驚かざるをえません。まず、災害ボランティアとして活動する人々の数が少ないという印象を受けます。1995年の阪神・淡路大震災では、100万人以上の人々が災害ボランティアとして被災地を訪れ、被災者の支えとなりました。1995年はボランティア元年と呼ばれ、災害ボランティアは、その後30年近くにわたって、様々な議論を巻き起こしつつも、日本社会に根付いていきました。ところが、能登半島地震では、災害ボランティア活動に参加する人々の数は少なく、災害ボランティアを交えた復旧・復興に向けた動きも緩慢に見えます。

次に、被災地の行政が十分に機能していないとい

う印象をもちます。もちろん、甚大な被害を受けた自治体の行政が平常時のように機能できるわけではありません。しかし、避難所や在宅で避難生活を続ける住民へのサービスや仮設住宅で生活を始めた住民への対応などにおいて様々な問題が指摘されてきました。

本特集に含まれる各論考では、能登半島地震の初期期に見られた問題点に着目し、それらの心理・社会・文化・歴史的背景を分析し、課題を整理して、今後に向けた提案や展望を示しています。具体的には、災害ボランティアが少なかったことの原因とその背景を分析し今回の活動についてこれまでの災害対応を含めて検討した論考、および、行政と市民が創り出す公が縮退している文脈を踏まえた災害対応の現状と展望を論じた論考を掲載しました。また、災害ボランティア活動を活性化しづらいつつ、高等教育機関としての大学と学生ボランティアのありかたについて事例をもとに検討した論考も掲載しました。そして、災害時にはいつも課題となる事柄について、能登半島地震で見られた優れた点と改善すべき（できる）点について、今回はペットと障害者・団体に注目した論考を掲載しています。

本特集に示された能登半島地震の初期対応における諸問題は、今後の被災地の復旧・復興に深刻な影響をもたらすでしょう。さらに、豪雨災害への対応が加わり、課題はさらに複雑化しています。本特集の執筆者はそれぞれに今も能登半島での研究実践を継続しています。『災害と共生』では、今後も能登半島地震に関連した論考を掲載して参ります。まずは、本特集に収められた初期対応に関する検討をおこなった論考が、研究者間のもとより多様な実践場面における対話へと結びついていくことを願っております。

2025年1月1日

編集委員を代表して

*1 大阪大学大学院人間科学研究科 教授・Ph.D (Psychology)

Professor, Graduate School of Human Sciences, Osaka University, Dr. Psychology.